6. 4. 22
産経新聞（　）
オピニオン

「アフリカの女性たち」①

モザンビーク外務省儀典部三等書記官
ファティマ・ブンベ（32）

伝統と西洋文明の調和は可能

アフリカの教育関係に携わる女性たちが国際協力事業団（JICA）の招きで来日、約一カ月の研修を終え、このほど帰国した。日本に対する感想などを聞いた。

◇

日本を見て感心したのは伝統的な生活様式が人々の間でしっかりと根づいていることだ。

わたしは、外国からの要人の接待や諸外国との相互理解を深めるために文化的な交流プログラムを組む仕事をしているが、仕事柄、この日本の伝統的な側面に大変興味を持った。

日本では普通の家庭にホームステイする機会があった。どこの家にもあるという畳の部屋に通された。そこでくつろぎ、食事をしながらおしゃべりを楽しみ、布団の中で寝た。独特の調べをもった童謡を歌い、はしを使って食べ、熱いふろにも入った。こうした習慣は日本人の西欧化した生活を想像していたわたしには新鮮な体験だった。

同じ家の中には、電子レンジ、トースター、オーブン、ステレオセットなど電気製品が備え付けられていた。働く場所には高層ビルが林立し、信じられないくらい多くの人、車があわただしく行き交う。生活と仕事を住み分ける日本人の姿がそこにはあった。

わたしはモザンビーク中心部の田舎で生まれた。長老を中心に家族を作り、老人をいたわる伝統的価値観が根強く残る土地柄だ。われわれ独自の料理や音楽、衣装もある。だが、それも内戦で破壊され、伝統を無視する人たちが多く現れ始めた。同時にさまざまな西欧文明が流入し、わたしたちの価値観すら崩壊し始めている。

モザンビークではこの一年、平和が続いている。日本を含めた国連の活動のおかげだ。日本の姿を見て、二つの異なった側面が調和するユニークな社会の実現はモザンビークでも可能だと確信した。

（聞き手　内藤泰朗）

6．4．23
産経新聞（　）
オピニオン

「アフリカの女性たち」②

南アフリカ共和国中学校教師
ピンキー・セフォロ（29）

政権が変われば教育も平等に

南アフリカでは、この四月末に初めて全人種が参加した選挙が行われる。私は選挙後に母国に良い変化がもたらされると期待している。

これまで私たち黒人は教育を受けるのも白人と隔絶されていた。また黒人が住んでいた地区では、これまで政府からの支援もほとんどなかった。治安に膨大な費用がかかり、教育には十分な資金が回らなかった。

今回、日本の学校を訪問して設備が整っていることに驚いた。一人の教師に対する生徒の数は多いが、十分な教育を受ける機会に恵まれている。学校では生徒たちがコンピューターを使って実践的な授業を受けていた。

しかし、私たちの多くは貧しく、教育に投資する余裕などないのが実情だ。子供たちは学校より農場へ駆り出される。美術でも交代で鉛筆を使っている。実務を身につけ創造性を養うための設備が不足している。

日本の子供たちは、学校が終わって塾に行かなければならないというが、自由に教育を受ける機会に恵まれているのはうらやましい。

アフリカ諸国の教育はもっと改善されなければならない。今後、工業化を進展させていくためには、科学技術の教育が重要だ。

もっと私たちには情報や書物が必要だ。教師も知識や訓練が不足している。知識や情報が多ければ生徒たちにもっと良い教育ができるし、国家はさらに豊かになる。

また雇用が満たされるような職業訓練センターの設立も不可欠だ。南アは失業率が高い。学校を卒業しても、十分な技術や教育が施されていないために職になかなかありつけない。そのため多くの若者は暴力や犯罪に走る。しかし、きちんとした教育を受け、経済状況が改善されれば、犯罪は次第に減っていくはずだ。

今後、政権が変われば教育も平等になる。教育への支援も増えるはずだ。将来、母国の発展のために日本にも人的、物的な支援を期待したい。

（聞き手　宇都宮尚志）

6．4．25
産経新聞（　）

オピニオン

「アフリカの女性たち」③

ナイジェリア中・高等学校教諭
ローズマリー・イデット・ウマーナ（34）

追い立てられている日本の子供

日本に来る前、日本人はみんな二十四時間のほとんどを働いているのだと思っていた。しかし、「百聞は一見にしかず」で、各地を見学して日本人もわれわれと同じ人間なのだと安堵（あんど）した。

ナイジェリアの初等・中等教育システムは日本と同じ六三三制で、そのうち義務教育は最初の九年間だ。さらに進学して勉強する場合、大学での教育期間は四年間とは限らない。専門分野によって、志望別に教師は三年、医者は五年、法律家は五年または六年の高等教育を受ける必要がある。

私が教えている学校は六年制で、日本の「中学＋高校」に相当する。前半の三年間が義務教育で、後半の三年間は希望者のみが進級する仕組みだ。

私の学校で教える科目は非常に多い。必修科目は数学、基礎科学、社会研究、ハウサ語・イボ語・ヨルバ語のうちの一つなど十五科目だ。

高等部では英語、数学、化学、物理学、生物学、地理学、歴史学、文学、政治学、木工、エレクトロニクス、英文タイプ、農業、製図、自動車工学などの科目を勉強する。

ナイジェリアの学校は日本の学校と比べ、コンピューター関係の教育機材が不足し、機材の充実は急務だ。なぜならナイジェリア国内の企業や諸団体ではすでに、多種多様なコンピューターが普及し、生徒たちが卒業して社会でコンピューターを扱う機会は非常に多いからだ。

見たところ、日本の学校は設備に恵まれており、子供たちはとても規律正しく教育されている。その半面、日本の子供たちは毎日の生活に絶えず追い立てられているような印象を受けた。

ナイジェリアでは子供たちは毎日六時間の授業を受けているが、土曜日には授業がない。家族とともにゆっくり過ごすのが普通である。

（聞き手　奥村泰雄）

6. 4. 26
産経新聞( )

オピニオン

「アフリカの女性たち」 ④

ザンビア中学校教師
ローズ・シンベイエ・シジア（32）

教科書不足の中で懸命な国造り

ザンビアには、七十以上もの部族が住んでいる。そして、それぞれの部族が違う言語を使っている。従って、われわれが学校教育で真っ先に取り組まなければならないのは、公用語となる英語を教えることになる。そうでなければ、お互いのコミュニケーションがとれなくなり、国としての一体性が保てなくなってしまう。この問題の深刻さは、単一言語民族の日本人にはわかりにくいだろう。

日本の学校を訪問して驚いたのは、コンピューター教育の普及ぶりだ。われわれとはちょっとレベルが違いすぎて、すぐに日本で研修したことを導入するということはとてもできないほどだ。

われわれは、コンピューターどころではなく、教科書や設備さえ不十分だ。日本と同じように、一クラスの生徒は四十人程度なのだが、教科書は十冊しかないというのが現状だ。教科書はすべて、英国から輸入しており、大変高価になってしまう。

理科系の教師の不足も問題になっている。医者やエンジニアになりたいというのが、今の子供たちの第一の希望だ。こうした期待にこたえられるようにしてこそ、ザンビアの発展、生活水準の向上に結びつくのだと思う。

私は高校で地理と英語を教えている。父が外交官で、ニューヨークや西ドイツ（当時）、タンザニアに滞在することができた。こういった恵まれた環境の中で育ち、大学に進学することができた。わが国はまだまだ貧しく、環境に恵まれなければなかなか十分な教育を受けることができない。

日本は都市が美しいのにびっくりした。人々は親切だ。小学校などを訪問してみると、子供たちはちょっとはにかみ屋さんが多い。残念なのは物価が高く、ザンビアで待っている子供たちにお土産を買うことができないことだ。

（聞き手　野木克己）

6．4．27
産経新聞（　）
オピニオン

「アフリカの女性たち」⑤

エリトリアのアスマラ大学生（元教員）
ルース・ベツアムラック・オクバミカエル（27）

独立戦争に勝利し祖国再建へ

紅海に面した海岸部に誕生したばかりのアフリカで最も新しい国エリトリアからきた。隣国のエチオピアと約三十年にわたり独立戦争を繰り広げ、昨年四月ようやく分離、独立を勝ちとった。だがこの間、人口の二％近い約六万人が犠牲となった。

現在、わたしは教職を離れて大学に入り直し、経済社会科学を学んでいる。戦争で破壊された国の再建には、まず経済を学ぶことが必要だと思った。

わたしは義務教育の七年を終え教壇に立った。とにかく、教えることのできる人が足りない、教材もない。学校といっても日本の子供たちのように恵まれた環境はなく、青空の下で勉強していた。そうした戦時下の状況では、教師になるのはごく自然なことだった。

授業はいつもできるとは限らない。わたし自身、六カ月間の軍事教練を受け、旧ソ連製軍用自動小銃カラシニコフを携行し、自由と植民地化からの脱却を目指してエチオピア軍と戦っていたからだ。わたしだけではなく、まわりが皆そうだった。エリトリアの女性たちはみな兵士としても立派に役目を果たす。当然、戦闘のないときに授業をすることになる。

日本では、小・中学校と身体障害者の特別クラスを視察したが、どこに行っても子供たちはとても忙しそうだった。一体、いつ遊ぶのだろうと不思議に思った。エリトリアでは、子供たちは午前か午後かのどちらかの授業を受けるだけで、あとは家の手伝いや遊びに使う。夏休みも三カ月間ある。

エリトリアは日本のように発展してはいないが、とても素朴な美しい国だ。独立戦争で工場や港湾施設などが破壊され、民間企業もほとんどない。仕事そのものがないのだ。

経済復興が最重要課題だが、わたしは自由を勝ち取った人々の力強さを信じている。

（聞き手　内藤泰朗）

＝おわり

JICA